

立命館大学アート・リサーチセンター
 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」
 2018 年度 共同研究成果報告書〔研究設備・資源活用型〕

2019 年 4 月 18 日 提出

1. 研究課題名	
18 世紀の上方・江戸における出版と都市文化の関連性 (英文表記: The Relationship Between Publication and Urban Culture on Kamigata and Edo in 18 Century)	
2. 研究代表者	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
石上 阿希(いしがみ あき)	国際日本文化研究センター・特任助教
3. 研究分担者 (合計: 名)	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
鈴木桂子(すずきけいこ)	衣笠総合研究機構・教授
加茂瑞穂(かもみずほ)	立命館大学文学部非常勤講師
金子貴昭(かねこたかあき)	衣笠総合研究機構・准教授
倉橋正恵(くらはしまさえ)	立命館大学アート・リサーチセンター・客員協力研究員
山本真紗子(やまもとまさこ)	立命館大学文学部非常勤講師
竹村さわ子(たけむらさわこ)	ライデン大学・Ph.D student
高須奈都子(たかすなつこ)	立命館大学アート・リサーチセンター・客員協力研究員
矢野明子(やのあきこ)	大英博物館アジア部・キュレーター
ローレンス・マルソー	ニュージーランド・オークランド大学・准教授
ミシェル・キューン	名古屋大学特任講師

4. 研究課題の概要
<p>本研究では、江戸中期に京都を拠点として活躍した浮世絵師である西川祐信(1671~1750)に着目し、18 世紀上方出版文化から江戸の都市文化へと続く知の連環を考察する。</p> <p>祐信は、上方だけではなく、江戸の絵師にも大きな影響を与えた絵師であり、多様な出版文化の展開を担った重要な人物であるにも関わらず、これまで十分な研究がされてきたとは言い難い。本研究は、祐信という絵師を核とした知的活動の展開と上方文化の江戸流入を明らかにすることを目的とする。</p> <p>研究活動の一つとして、毎月 1 回 アート・リサーチセンターにて西川祐信の着物雛形本『正徳雛形』の研究会</p>

を開催。染織、文学、美術など様々な研究者をメンバーとして『正徳雛形』に記載された各雛形を分析し、模様の典拠となった文学、演劇との関連性を考察する。

5. 研究成果の概要

毎月 1 回「西川祐信雛形本研究会」を開催し、『正徳雛形』の翻刻・語釈を行った。2018 年度は全 11 回(第 48～58 回)開催。具体的には着物の雛形に付された文章を翻刻し、語釈を行うことで着物の色や模様を再現し、文化的背景を考察する。発表後は、翻刻内容をもとに、色や模様のインデックス化を行っている。

また、2017 年度に日文研に新収蔵された『正徳雛形』によって諸本の書誌情報、画像情報を充実させることができ、翻刻の精度を高めることができた。日文研本は 2019 年 4 月～5 月に渋谷区立松濤美術館で開催される「女・おんな・オンナー浮世絵にみる女のくらし」に出展し、研究会の研究成果を広く発信する予定である。

研究会活動について代表者石上が 2018 年 10 月 31 日 ARC セミナーにて「雛形本を読み解く—西川祐信雛形本研究会活動報告」のテーマで発表した。